

砂金

長篇小説

小島政一郎

読売新聞社

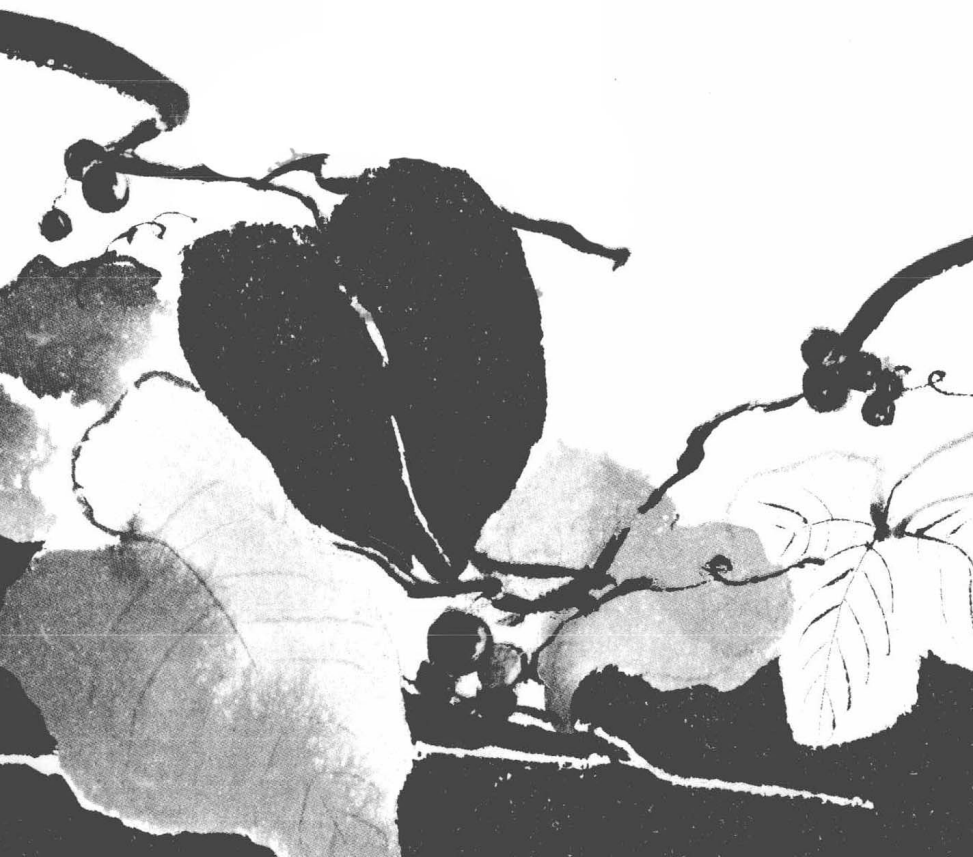


読売新聞社

小島政二郎

長篇小説

砂金



砂金^{さきん}

長篇小説

昭和五十四年五月十五日 第一刷

著者 小島政二郎^{こじまじろう}

編集人 笠井晴信

発行人 深見和夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 一〇〇

大阪市北区野崎町八の十 一五三〇

北九州市小倉北区明和町一の十一 一八〇二

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 九八〇円

© 1979, Masajiro Kojima

0093-702580-8715

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

砂金

長篇小説

装丁
山本亜稀

さあ、いよいよ書き出した。

小説家が一番苦労するのは、この書き出しである。ゲーテくらい書き出しのまずい作家はいまい。「親和力」という小説の書き出しは

B A
夫婦

D C
夫婦

AがいかにしてDで結び付き、CがいかにしてBと結び付くかをこれから語ろうと思う、と云うのが書き出した。

こんな書き出しを読まされたら、先きを読もうという興味がなくなってしまう。折角買った「親和力」を私はそのまま読まなかった。

意外に書き出しのうまいのは、佐藤春夫だ。「高木がマリに三百円出してやろうと云ったのは全くただの気まぐれだった。高木という人物を知っているならば、このことは誰にもすぐわかる」

「マリが高木のところへ相談に来たのも、高木のそんな気質を三浦から聞いていたものだから、ひよっとしたらという心頼みと、それにマリにとってはこの場合、たとい駄目にしたところで高木にでも泣きついてみるより法がつかなかったのである」

「マリは思いがけなく捉まえられたのだ」

これは「売笑婦マリ」の書き出しだが、小説の書き出しらしくなく、淡々として身の上話を語るような口調のところが興味を唆るのかも知れない。

自分のことを自慢するのはおかしいが、私は書き出しがうまいので文壇では有名だった。

「小島の張り手」

と云って、新聞小説は第一回で読者を掴まえなければならぬので、そんないやな言葉で持て囃されたものだ。

しかし、年を取ったせいとか、私も張り手なんか用いようとは考えなくなった。いや、それどころか、張り手を用いる力士を憎むようになった。だから、この小説では一番下手な、ゲーテよりもまずい書き出しをしようと思った。

小説には男と女とが登場しなければ、成り立たない。男が主人公だから、男の紹介からしよう。当分つまらないから、私に好意があるなら、暫く我慢して下さい。

私は、上野公園の近くの、柳河屋やながわやと云う小さな呉服屋に生まれた。小さいと云っても、土地を三百坪持ち、家も自分のものだった。土蔵を一棟、大地震にも崩れず、火に焼けてもビクともしなかった。土地の半分、いや、残りの百坪に貸家を三軒持っていた。外に、入谷に八軒ほど貸家を持っていたが、それも大地震の被害を受けなかった。

財産はどのくらいあったのか、その頃は長男が全部相続したから、次男の私は知らない。兄が呉服屋を継いだお蔭で、私は慶応の文科へ入った。永井荷風に教わりたいた一心で入ったのだ。

しかし、荷風には本科の二年生にならなければ教えて貰えず、私が本科の一年になった時、彼は止めていなくなってしまった。私はメドを失って途方に暮れた。私は勉強家ではなかったが、成績がよかったので、西洋美術史の澤木四方吉教授に認められて、国文学の先生として学校に残ることになった。

私は好きで、落語や講釈をよく聞きに行った。仕合せなことに、落語にも、講釈にも、名人上手が大勢いた。歌舞伎を見に行けば、そこにも名人上手が大勢いた。芸人ばかりでなく、鰻うなぎや天麩羅、西洋料理を食べに行けば、名人と呼ぶより外に呼びようのない職人がいた。私の一生にとっ

て、いろんな方面の、こうした一世紀に一人か二人しかいない名人の芸を聞き、名人のこしらえてくれたお料理を食べたことが、どんなに芸の高みを味うことの喜びを知ったか分らなかった。一生中の最高の仕合せだったと思っている。

女についても、下町に生まれたお蔭で、子供の時から「いい女」を見る機会が多かった。その頃は今と違って、いろんな美人が、いろんな服装が、いろんな化粧が氾濫していなかった。何かにつけて一定の型があった。芸者には芸者の美があり、素人娘には素人娘の美があり、裏店の貧乏な娘にも、一種の風俗があり、彼女らしい美人がいた。押し並べて、派手を嫌ってみんな質素であった。彼女達は貧しいながらも潑刺とした生活のよさを持っていた。芸者が人力車に乗る時の、斜に構えたスタイルのよさなども、子供の時から見て知っていた。

「てんぐによい女房を持つ気なり」

そんな川柳があるように、同級生達はいろんな空想を描いては楽しんでた。慶応だから、大金持ちの息子もいたし、地方の大地主の息子もいたし、千差万別だったが、いざ蓋を明けて見ると、富豪の息子が長唄の師匠を貰ったり、貰ったと思ったら、惚れて無理して貰った女房が気違いになったり、大阪の有名な芸者に小指を切らせた甲斐もなく、添い遂げられなかった友達もあった。

東北出の同級生は、有名な芸者の娘を貰って、花柳界の近くに世帯を持って、猫を何匹も飼っ

て、近所の芸者達のラヴレターの代書を書いてやるのを念願にしていた。ところが、貰った嫁さんが、芸者の娘のくせに猫が大嫌いで、一生の念願の一つが叶えられなかった。この細君とは、猫が嫌いな点で私は仲よしになれた。亭主は仕方なしに、猫のことを書いた英語の本を五六十冊集めて、憂さを霽らしていた。彼から聞かされた猫の話の中には、二つ三つどうしても話して聞かせたい話がある、話したら、涙を流さずにいられない真に迫った話や、膝を叩いて笑い出さずにいられない話があるのだが、私は猫が嫌いだから、話したくない。

そういう連中が、みんな私のことを

「小島はきつと、黒衿の掛かった着物の似合う下町生まれのかみさんを持つに違いない」

私の未来を、そう判断して間違いないと信じていた。事実、講釈の中には、私好みの女が幾人も、文慶とか、典山とかいう名人の芸を通して生けるが如く描き出されて来る。例えば

好きと嫌いは

どれ程違う

命ただやる

ほど違う

こんな女がいたら、わが最上の仕合せだと思わずにいられないではないか。芸の如実で生かされ

ているのだから、この可愛い彼女の胸が目の前に息づいているのだ。

殊に、私の母が、店の通い番頭が暖簾を分けて貰って世帯を持つ時、どこで探して来たのか、可愛いお嫁さんまで世話してやった。

このお嫁さんが、実にいいお嫁さんだった。あんまり口を利かず、静かな、引き息の、しとやかな、蔭日向のない、働き者というのではないが、至れり尽くせりの女らしい女だった。いい姿をしていた。可愛がつてやらずにいられないような、いい意味の、質素が、身に付いた、足が地に付いているような若い女房振りだった。兄も、私も、一ト目見て惚れた。

「母にこんな素晴らしい選択眼があるうとは、今の今まで知らなかった」

私のお嫁さんは、母に任せて置けば安心だ、私達はそう思っていた。

落語や講釈の鑑賞や、芸術の風俗を見ることによって、私の感性が洗練されて行ったことは否定出来なかった。私の好みは大体形作られて行った。下町の質素な生活も、私に根本的な影響を与えた。これは日本的な素養になった。

もう一つ、私の子供の頃から上野新橋間の鉄道馬車が出来て、一区間三銭で乗れた。一区というのは、上野神田間、神田日本橋間、日本橋京橋間、京橋新橋間、だから九銭あれば京橋まで行けた。京橋まで行けば、すぐ銀座だ。

私にとって、銀座はハイカラな町だった。資生堂だの、函館屋だのは、子供の私達には中へ入れはしなかったが、西洋を感じさせた。前を通るだけで西洋を感じさせた。私が初めて西洋を感じたのは、銀座の町からだった。一人では無論入れなかったが、父や母や、叔父さんに連れられて風月堂へ入って行った時の目鼻に感じる西洋の匂いはワクワクする程嬉しかった。

ウェーファー、ゴーフル、ビスケット、チョコレート。ビスケット、チョコレートと名は同じでも、そこらで売っているビスケットやチョコレートとは味が違うのだ。日本のものではなくて、西洋の匂いがした。一度、驚いたことに、小学生の頃遠足で飛鳥山へ行った時、茶店の小母さんが私のチョコレートの箱を見て、中のチョコレートを五つ程くれないかと云う。やると、自分の所で売っている日本出来のチョコレートを一箱くれた。その後、行く度に同じ小母さんが私のチョコレートをせびりに来た。或時一箱買ったら、日本出来のチョコレートを五箱くれた。

飛鳥山の茶店の小母さんすら、風月のチョコレートのうまさを知っていて、そんな交換をしてくれた。実際、それ程うまかった。殊に、ワッフルのうまさ、素晴らしさ。ワッフルを買って貰った時の嬉しさ。嬉しさに胸のはずむ思いを未だに覚えていて。手触りから、舌触り、喉を通る時の、西洋の味と匂い、ビスケットやチョコレートよりも大きいし、柔かいし、ジャムの甘い匂い、これこそ全部西洋だった。

函館屋のアイスクリーム。資生堂のアイスクリームも、驚くべき発見だったが、函館屋のアイスクリームの方が、もっと堅くって、ハイカラで、うまかった。函館屋の店は小さくって、やや薄暗かったが、売っているものは全部西洋のものばかりだった。ここで干杏子はしあんずを初めて買って貰って、最初の一つを口にした時の歓喜は全身が顫えるような感動だった。

私は何を云おうとしているのか。私が英語が少し読めるようになり、英訳のモーパッサンの五十銭本を買いに丸善に行って西洋の匂いを嗅ぐよりも前に、私は銀座で西洋の匂いを嗅いでいたことを語りたかったのだ。子供の感覚というのは不思議なものだ。

私の中学の上級生の頃、小山内薫おさないが左団次と組んで自由劇場の旗揚げをした。森鷗外がイブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を翻訳して、高浜虚子がそれを筆記して、今の人には想像もつかないだろう、「国民新聞」に連載した。読んでもよく分らなかったが、西洋の偉い作家の書いた戯曲だし、鷗外が訳し、小山内が上演するのだから大したものなのだろうと思って、私も自由劇場の会員になった。

自由劇場という名もいいし、雑誌に載る広告に、あれも向うの自由劇場の紋どころなのだろう、葡萄の房を模様化した絵も、今まで見たこともない清新な空気が私達を魅了した。

後に、小山内達はこの葡萄の模様を羽織の紋に染めて着て歩いていた。その頃は、洋服よりもま

だ和服を着ている文士が多かった。ルバーシカを最初に着たのも、確か小山内達だった。小山内は西洋好きで、慶応へ教えに来る時など、身のまわりの所持品は、ナイフ一つでも大抵舶来品だった。大学生になってから、小山内先生や馬場孤蝶先生のお供をして丸善へ行くと、

「丸善には借金ばかり出来てなかなか払えないので、近頃では現金払いで買うことにしているのだ」そう云っていた。次ぎの芥川、菊池の時代になると、借金なんかなかった。文士の経済状態がこの辺を機会に多少変ったのだろう。

私の中学の上級生の頃に、「白樺」「スバル」「三田文学」「早稲田文学」「文章世界」などが創刊されて、新しい文学を迎えようとする空気が潑刺として来た。馬場孤蝶の訳した「ブル・ド・スイフ」というモーパッサンの小説で初めて自然主義のホンモノに触れた。今と違って翻訳が少く、西洋の作品に接しようと思えば、英訳にたよる外なかった。フランス語、ドイツ語、ロシア語の出来る人はまだごく少しかいなかった。米川正夫や中村白葉は、まだ「文章世界」の投書家だった。

私には、こういう二面が——日本と西洋が体の中にあつた。が、菊池寛のように、英語の字引がなくって、折口信夫のように国語の字引がなくって、英語のものが読め、日本の古典が読めるような学力はなかった。字引きがなくっては、どっちも読めない程度の学力しかなかった。

それでも神田の古木屋を漁りに行くと、いろいろ欲しい本が安く手に入った。その中に、詩人や小説家の評伝が幾つかあった。その中に、彼等の恋人の写真が出ていたのを見ているうちに、私の若い心は、日本風の美人よりも、彫りの深い表情の西洋の美人に引かれるようになった。そういう本には、彼等の激しい恋愛の悲劇的な顛末がうまい文章で書かれていた。中には、決闘の結果、まだ天才が完全に発芽しないうちに命を落した例もあった。不思議に、西洋には女の助けによつて才能を伸ばした詩人、小説家の例はなかった。そういう例は、日本の女性の専有物のようだった。

阿部次郎がゲーテの生涯を講義していたが、その講義が終わらないうちに、仙台の大学に新らしい文科が設置されることになって、小宮豊隆と一緒に赴任することになった。それもただの赴任ではなく、新らしく文科大学を開く基礎を作る仕事に参加すると云う意味で情熱を燃やしているという話だった。

で、最後に私達に別れの言葉を残して行きたいという意味の一時間だか二時間だかの講義があった。みんな忘れてしまったが、一つだけ覚えていたことがあった。

それは勉強する態度のことだが、自分の好きなことばかり勉強してはモノにならない。ダイアレクチックな勉強をしなければ、自分の学問を完成することは出来ない。ダイアレクチックと云うのは、自分の好きでない、嫌いな、自説とは反対のものを、何とかして自分の知識の中に取り入

れて、咀嚼^{そしやく}することだ。そのくらいのこととしか私には理解出来なかった。

私は学者になる気はなかったが、自分の学問を十分なものにするためには、ダイアレクチックの方法は大事なことに違いない。そう思った。しかし、大人^{おとな}になって考えて見ると、

「やっぱり学者の説だよ。小説家には邪魔になるばかりだ。小説家に大事なものは自己ばかりだ。ダイアレクチックなんか小説家には無用だ」

そう考えたのは、余程大人になってからのことで、若い頃はいいことを聞いたと思つたばかりに、私は女のこと、柄^{がら}にないこのダイアレクチックで一生の失敗をした。

中学生の私は、三年生までは秀才だったが、代数、三角、幾何が課目の中へ入って来ると、忽ち落第生になった。出来るのは国語だけ。英語も普通。こんな成績では、一高にも三高にも官立の高等学校へ入る資格はない。慶応にしても、数学のある理財科を望むことは無理だった。数学のない文科に入れるかも知れない。

私の中学は、一高に入る生徒以外は問題にしていなかった。ああいう教育方針はよくないと思う。若い生徒が学校に反感を持ち、私のように自分の学力を故意にアンダーヴァリュ^ヤして自棄^{やけ}を起こす危険がある。一生の一番大事の時に――

幸い、丁度お誂^{あつち}え時に、慶応の文科に大改革があつて、永井荷風がフランス文学の教授として迎

えられることになった。森鷗外と上田敏が顧問になり、小山内薫や小宮豊隆や阿部次郎が先生になることが大々的に新聞に書き立てられた。

私はそのニュースにどんなに喜んだことか。私の行く道がハッキリ極まった。明治大正の頃は、小説家になったところで生活して行ける目当てはなかった。川上眉山^{びざん}が食えなくなつて自殺した。実際はそうではなかったが、世間ではそう云う風に受け取った。私の父も、そういう一人だった。

だから、正面から文科に入りたいと云つたつて、許されっこないのは知っていた。理財科に入るような顔をして文科への願書を出した。「あめりか物語」で、荷風がいかに私達青年の心を捉えたか——いや、そんな程度のものではない。身も魂も搔^かッさらつて行つた。あとから考えて見れば、荷風の作品はそんな高い作品ではなかった。青年向きの、若々しい作品に過ぎなかった。が、それまでにそういう種類の小説がなかったから、青年の情熱を捉えたのだ。

それまでの自然主義の作品が、余りに地味で、生活苦を主題にした小説ばかりだったから、青年を引き付ける魅力が全然なかった。文章も主題に応じて地味で、青年を喜ばせるような文章のよさもなかった。それが本当の小説であり、それが本当の文章なのだが——。しかし、青年に本当の小説、本当の文章が分る筈がない。華やかな恋愛があり、派手な、調子のいい荷風の文章、それに彼には当時の日本の政治、浅薄な輸入文化に対する批判があった。それが反抗精神のように青年には